

## 日本バレーボール界の変遷（1） －トップレベルのリーグ40年の変遷について－

岡部 修一  
Okabe Shuichi

### 1. はじめに

2011年7月、サッカー女子ワールドカップにおいて、「なでしこジャパン」の愛称をもつ日本女子チームが、世界ランキング1位のアメリカに勝利し世界一の座についた。過去の対戦成績0勝21敗3分けと圧倒されていたアメリカに対し、決勝戦は延長戦まで粘ってのドローそしてPK戦の末の歴史的勝利であった。日本スポーツ史上、これまで団体の球技で世界一を成し遂げたのは、男子のバレーボールと野球、女子のバレーボールとソフトボールがあるが、今回の女子サッカーは4種目めである。

団体の球技としては他に、バスケットボール、ハンドボール、ラグビー、アメリカンフットボール、水球、ホッケー、アイスホッケーなどがあり、これらはいずれも同一コートで相手チームと接触しながらプレーする競技形態である。相手チームとの接触プレーともなれば、身長や体重など体格、体型の差が競技力に大きく影響を及ぼす。外国人に比べ体のサイズの小さい日本人が不利なことは否めず、世界レベルで上位進出を果たすことは難しい。一方、バレーボールはネットでコートが分割されて接触プレーではない。また野球とソフトボールも同一グラウンド上のプレーではあるが、集団で接触しながらプレーする競技形態ではない。世界一となったこれらの種目では、俊敏さや器用さなど日本人の得意要素が活かされたり、技術や戦術などでカバーできる余地も多く、そこに日本が勝利できた要因があると考えられる。その意味でいえば、相手チームと接触しながらプレーするサッカーで世界一を成し遂げた「なでしこジャパン」は、まさに歴史的快挙といえる。

このワールドカップ優勝によってなでしこジャパンは日本国内で熱狂的、過熱的ともいえるブームを生み、一躍注目を集める存在となった。マスコミ取材が殺到、強化合宿には多数の観衆が詰めかけ、国内試合であるなでしこリーグには、これまでの十数倍という観客が押し寄せる事態となっている。

スポーツの飛躍と発展にとって、世間の関心や注目を集めるということは極めて重要な要因である。

日本のバレーボールが世界トップレベルにあった1970年代～80年代、世間から大きな注目、関心を集めていたが、現在では女性の一部世代を除いて、人気面で他のスポーツの後塵を拝している。かつて人気を博した時代から現在までの日本バレーボール界トップレベルリーグの変遷をまとめる。

### 2. オリンピック大会における日本の球技

団体の球技には、オリンピック、世界選手権、ワールドカップという世界規模の大会が開催されている。サッカーや野球は例外として、三大タイトルの中で日本人はオリンピックに対して、最もステータスを感じ「世界一」のイメージを抱く傾向がある。表1は、過去のオリンピックで日本の団体球技種目が獲得したメダルである。

バレーボールは1964年東京大会と1976年モントリオール大会で女子が、1972年ミュンヘン大会で男子がそれぞれ金メダルを獲得した。これ以外にも銀メダル(2位)と銅メダル(3位)を男女合わせて5回獲得している。(表1参照)

年度	開催都市	金メダル	銀メダル	銅メダル
1932	ロスアンゼルス		男子ホッケー	
1964	東京	女子バレー		男子バレー
1968	メキシコシティ		女子バレー	サッカー
			男子バレー	
1972	ミュンヘン	男子バレー	女子バレー	
1976	モントリオール	女子バレー		
1980	モスクワ	政治的理由により不参加		
1984	ロスアンゼルス	【野球】*		女子バレー
1988	ソウル		【野球】*	
1992	バルセロナ			野球
1996	アトランタ		野球	
2000	シドニー		ソフトボール	
2004	アテネ			野球
				ソフトボール
2008	北京	ソフトボール		

【野球】は公開競技

表1. オリンピック球技種目(団体)における日本のメダル実績

野球とソフトボールの関係者は次大会からの復活をめざしたが、2016年リオデジャネイロ大会でも競技種目への採用はされなかった。IOCは近代オリンピック成立の歴史的経緯から、伝統的にヨーロッパ諸国の影響力が強い。ほぼ還太平洋地域の諸国にしか普及しておらずヨーロッパ地域で極めてマイナーな存在の野球とソフトボールは、よほど世界的規模の普及が進まないかぎり、今後も採用競技に復活するのは難しいと考えられている。

### 3. 世界の中での日本バレーボール

昨年(2010年)10月、日本で開催された女子世界選手権において日本は3位となり、銅メダルを獲得した。これはオリンピック、世界選手権、ワールドカップという世界三大タイトルの大会で日本女子チームが26年ぶりに獲得したメダルである。男子は1977年ワールドカップでの銀メダル以降、33年間メダルから遠ざかっている。かつて男女共に金メダルを獲得したバレーボールは、世界の頂点に立つ国民的スポーツとして、球技では野球に次ぐ人気を誇っていたが、女子は1990年代以後、男子は1980年代後半から、成績不振におちいり低迷の時代が長く続いた。(表2参照)

世界トップレベルの時代、バレーボールは日本のお家芸とまで言われ、技術や戦術の点で世界最先端にあった。それまで高さやパワー頼みのスタイルが主流だったバレーボールに、スピードとタイミングという斬新な要素を加え、常識を越えた発想から作り出したのが男子の「速攻コンビネーションバレー」であり、守備における男子の「フ

バレーボール以外では1984年ロスアンゼルス大会で公開競技の野球が金メダルを獲得、その後2008年北京大会までの7大会中5大会でメダルを獲得している。また1996年アトランタ大会から正式競技となったソフトボール(女子)は2008年北京大会までの4大会中3大会でメダルを獲得、北京大会では宿敵アメリカを倒し、悲願であった金メダルを獲得した。日本の団体球技種目において、野球とソフトボールはメダル獲得の有力種目であったが、国際オリンピック委員会(IOC)は2005年7月8日の総会で2012年ロンドン大会での野球とソフトボールの競技種目除外を決定した。その理由として野球はIOC加盟の202の国・地域の中で110の国・地域にしか国内競技連盟がなく、またドーピング検査での違反率が他の種目より高いこと、ソフトボールは2004年アテネ大会でのメディア

注目度の低さがあげられた。野球とソフトボ

男 子						女 子					
年度	オリンピック	年度	世界選手権	年度	ワールドカップ	年度	オリンピック	年度	世界選手権	年度	ワールドカップ
		1960	8位					1960	<b>2位</b>		
1964	<b>3位</b>	1962	5位			1964	<b>優勝</b>	1962	<b>優勝</b>		
1968	<b>2位</b>	1966	5位	1965	4位	1968	<b>2位</b>	1966	<b>優勝</b>		
1972	<b>優勝</b>	1970	<b>3位</b>	1969	<b>2位</b>	1972	<b>2位</b>	1970	<b>2位</b>	1973	<b>2位</b>
1976	4位	1974	<b>3位</b>	1977	<b>2位</b>	1976	<b>優勝</b>	1974	<b>優勝</b>	1977	<b>優勝</b>
1980	予選敗退	1978	11位	1981	6位	1980	不参加	1978	<b>2位</b>	1981	<b>2位</b>
1984	7位	1982	4位	1985	6位	1984	<b>3位</b>	1982	4位	1985	4位
1988	10位	1986	16位	1989	6位	1988	4位	1986	7位	1989	4位
1992	6位	1990	11位	1991	4位	1992	5位	1990	8位	1991	7位
1996	予選敗退	1994	9位	1995	5位	1996	9位	1994	7位	1995	6位
2000	予選敗退	1998	13位	1999	10位	2000	予選敗退	1998	8位	1999	6位
2004	予選敗退	2002	9位	2003	9位	2004	5位	2002	13位	2003	5位
2008	11位	2006	8位	2007	9位	2008	5位	2006	6位	2007	7位
		2010	13位					2010	<b>3位</b>		

表2. 世界三大会における日本男女チームの成績

太字はメダル獲得

ライングレシーブ」や女子の「回転レシーブ」である。

男子は9人制時代からの伝統的な「Aクイック」を基本として新たにB、C、Dクイックを考案、それらの速攻に絡ませる形で多彩な時間差攻撃、移動攻撃を編み出した。すべてはソ連および東欧諸国チームの高いブロックを、速さとタイミングと幻惑する動きで打破するための戦法であり、72年のミュンヘン大会では速攻コンビネーションバレーを駆使して男子が優勝した。1964年東京大会で素早く攻守の切り替えのできる「回転レシーブ」で優勝した女子も、1976年のモントリオール大会では男子に似た速い攻撃スタイルのバレーで他国を圧倒、金メダルを獲得した。

その後、日本の成績が振わなくなった原因としては、さまざまな理由が考えられる。

日本が世界一となるために考案した男子の速攻コンビネーションバレーや女子の回転レシーブなど独自の戦術や技術が外国に伝播し標準化されたこと、1970年代までの日本対ソ連という2強対決の構図からヨーロッパ、南米諸国を中心とした新たな勢力の台頭を受け、高身長を活かした諸外国の革新的な戦術や戦法（サブレシーブ2人制、リードブロック、バックアタックの多用）が考案されたこと、その導入や対応に日本が立ち遅れたこと、また日本協会の強化策（世代交代）の失敗、そして世界トップレベルの選手の長身化によって、バレーボールの競技要素の中で高さが絶対的条件になりつつあり、主に身長面で日本の体格的不利が顕著になったこと、などである。

## 4. 国内リーグの変遷

年度	日本リーグ	実業団リーグ	地域リーグ	
			東部リーグ	西部リーグ
1970	日本鋼管	住友金属	日立国分 朝日生命 警視庁 新日鉄室蘭 日電東北 日産ディーゼル	大協石油 新日本電気 日電中国 新日鉄化学 松下電工 三洋電機
	松下電器	住友軽金属		
	富士フィルム	シチズン時計		
	専売広島	東レ九鱗会		
	八幡製鉄	帝人三原		
	旭化成旭陽会	日本ビクター		
1980	八幡製鉄	住友軽金属	NTT東北 日立国分 日本電装 東京ガス 朝日生命 富士通川崎 警視庁 三洋電機東京	トヨタ自動車 新日鉄化学 武田薬品光 豊田合成 NTT中国 武田薬品 アイシン精機 三洋電機鳥取
	富士フィルム	帝人三原		
	専売広島	日本電気		
	松下電器	東レ九鱗会		
	住友金属	旭化成旭陽会		
	日本鋼管	日電東海		
	サントリー			
	神戸製鋼			
1990	新日本製鉄	日新製鋼		
	サントリー	NKK		
	日本電気	神戸製鋼		
	JT	NTT東海		
	富士フィルム	旭化成		
	象印	日本電気HE		
	東レ九鱗会	住友金属		
	松下電器	コスモ石油		

表3-1. 1970・1980・1990年度 男子  
日本リーグ・実業団リーグ・地域リーグの所属チーム（成績順）

1964年東京オリンピックで女子が金メダルを獲得後、日本バレーボール協会は国内強化策の一環として1967年に全日本バレーボール選抜男女リーグ（以下日本リーグ）を創設した。参加したのは1952年から開催されていた「全日本都市対抗バレーボール優勝大会」で優勝経験や上位進出を果たした強豪チームである。

第1回日本リーグ参加チーム

男子：八幡製鉄、松下電器、日本鋼管、専売広島、富士フィルム、住友金属

女子：日立武蔵、ヤシカ、ニチポー貝塚、全鐘紡、東洋紡守口、林兼産業

表3-1、2は、男女の日本リーグ（創設1967年）、実業団リーグ（創設1969年）および地域リーグ（創設1980年）の10年ごとの所属チームを示している。

日本リーグ創設から2年後の1969年に、日本リーグ下部に実業団リーグが創設された。さらに1980年度からは協会直轄ではないが日本実業団バレーボール連盟主管の実業団選抜リーグ（地域リーグ）も創設され、企業チームが対抗する形式で運営を図ってきた。1960年代半ばから1970年代末頃まで、世界トップレベルにあった

バレーボールの国民の人気や関心を背景に多くの企業チームがバレーボール部を創部した。

3つのリーグ間では、それぞれ上位リーグとの入れ替え戦制度を導入、企業チーム同士の切磋琢磨を促すことで強化策のクオリティをあげた。リーグ所属チームをみればほとんどが大手企業で、男子では鉄鋼、家電メーカー、女子は紡績、繊維、家電メーカー、公社が目立っている。

当時男子では大学生の有望選手を本社人事で採用、女子では高校生の有望選手を入社させていた。当初6チームで発足した日本リーグは1980年度から、そして実業団リーグも1983年度から8チーム制に拡大する。出来るだけ多くのチームに強化の場を提供すること、チーム数増加による有料試合を増やすことで事業収入増をもくろむのである。

1970年～1980年にはほとんど1社1チームであったが、1990年には1社で複数のチームやグループ企業内で別々にチームが所属するなどの傾向がみえる。企業スポーツでは、本社所在地だけでなく全国各地の支社、事業所にチ

年度	日本リーグ	実業団リーグ	地域リーグ				
			東部リーグ	西部リーグ			
1970	ユニチカ貝塚	三洋電機	東芝深谷 日本鋼管 朝日生命 東芝鶴見 富士通川崎 日立佐和	石川繊維 石川島播磨呉 武田薬品 新日本電気 新日鉄堺 日本電装			
	日立武蔵	富士フィルム					
	ヤシカ	日本鋼管					
	東洋紡守口	大洋デパート					
	倉坊倉敷	電電神戸					
	全鐘紡	住友軽金属					
1980	ユニチカ	久光製薬	東芝深谷 朝日生命 東芝鶴見 富士通川崎 日立佐和	JT カネボウ 新日鉄堺 NTT 関西神戸 石川島播磨呉 武田薬品 タイガー魔法瓶 三菱電機京都			
	東洋紡	電電神戸					
	日立	イトヨーカドー					
	日本電気	倉坊倉敷					
	富士フィルム	ソニー大崎					
	カネボウ	専売大阪					
	三洋電機						
	日立茂原						
	1990	日立			久光製薬	東芝深谷 朝日生命 PFU たくぎん 日本電気玉川 トヨタ車体 東北バイオニア 富士通川崎	JT カネボウ 新日鉄堺 NTT 関西神戸 石川島播磨呉 武田薬品 タイガー魔法瓶 三菱電機京都
		イトヨーカドー			クラボウ		
日本電気		富士フィルム					
ユニチカ		関西日本電気					
小田急		日本電装					
ダイエー		日立佐和					
東芝		日立茂原					
東洋紡		ソニー大崎					

表3-2. 1970・1980・1990年度 女子  
日本リーグ・実業団リーグ・地域リーグの所属チーム（成績順）

ームが存在することは一般的である。しかし、社員の福利厚生の意味合いのスポーツチームでなく、全国レベルのリーグに加盟して強化を図るチームをひとつの企業が複数抱えるというのは、当時のバレーボール人気と好景気に支えられた企業の体力を物語っている。

## 5. 相次ぐ強豪チームの休廃部

1990年までを日本バレーボールトップレベルの絶頂期とすれば、その後の1990年代後半からは暗黒時代ともいえる苦難の時期を迎えた。バブル崩壊による長期的経済不況と全日本チームの世界レベルでの成績不振を受け、企業チームの休廃部が相次ぎ、バレーボールの凋落低迷が顕著になった。

表4は日本リーグ実業団リーグ参加経験があり、1990年以降に休廃部したトップレベルのチームである。創成期から参加していた男子のNKK、富士フィルム、女子のユニチカフェニックス、日立ベルフィーユという伝統チームはじめ、NECブルーロケッツ、オレンジアタッカーズ、イトヨーカドープリオールなどの強豪チームが姿を消している。いずれも日本リー

グや全日本選手権での優勝経験があり、人気、実力ともに兼ね備えたチームであったが、経済状況悪化による企業の厳しいコストダウン、リストラ計画の一環として休廃部が容赦なく断行された。

この時期はバレーボールばかりでなく、野球、バスケットボール、駅伝を中心とする陸上競技など他の企業スポーツでも休廃部が相次ぎ、日本のスポーツ発展を担ってきた企業スポーツは大きな岐路にさしかかることになる。

かつて世界トップレベルの実力を備え「日本のお家芸」と称賛された過去、国民の人気を受けマスメディアへの露出の多さを誇った時代、そして相次ぐ企業チームの創部によるリーグ拡大など、華やかな隆盛を極めたバレーボールだけに他の企業スポーツと比べて、より衰退し没落した印象と喪失感がある。

1990年以降の企業スポーツチーム休廃部の流れは、選手育成やスポーツ強化を企業スポーツに全面的に依存することへの限界を示したともいえ、バレーボールについて、学校スポーツから企業スポーツという、それまでの選手育成プロセス見直しと転換を図る必要性に至った。

休廃部した女子チームの中にはチームごと移籍というケースもある。ダイエーは紆余曲折を経て久光製薬スプ

年	男子	女子
1991		クラボウ
1994	NKK	
1995	神戸製鋼	富士フィルム
1997	NECホームエレクトロニクス 日新製鋼	
1998	住友金属 象印 コスモ石油	
1999		東芝シーガルズ 小田急 NEC関西
2000	(新日鉄)	ユニチカ ダイエー
2001		日立ベルフィーユ イトーヨーカドー
2002	富士フィルム NTT西日本レグルス 日立国分 NTT西日本中国	東洋紡 ソニー大崎
2006	旭化成	茂原アルカス
2009	NEC	武富士

表4. 1990年以降に休廃部した主な強豪バレーボールチーム

力、練習環境、勤務体制などの違いによるもので、日本リーグや実業団リーグ上位チームでは、選手やスタッフは社員でありながら一般的な業務を大幅に免除され、練習に専念できる環境を用意されていた。また新人選手補強の面でも大学、高校を問わず毎年数人の有望選手獲得が可能であった。一方、地域リーグのチームでは勤務が一般社員とほぼ同等、新人選手の補強でも大学生の採用はなかなか難しいという状況が多かった。身分は同じ社員でありながら、バレーボールに専念できる環境を備えたプロに近いチームと、仕事とスポーツの両立を図らざるを得ないアマチュアのチームというスポーツ環境面で厳然たる差が存在したのである。

しかし1990年代以降、名門も強豪も歴史や伝統も全く関係のない聖域なき休廃部の時代を迎える。

表4に示すように1991年から2002年までの12年間で、トップレベルリーグ参加経験のある22チームが休廃部となった。Vリーグ、V1リーグを構成する男女32チーム中、22チームが消滅する惨憺たる事態である。

そしてチーム数確保のため、地域リーグからトップレベル2リーグへ昇格(引き上げ)するチームが増加した。

この結果、プレミアリーグ(旧日本リーグ)、チャレンジリーグ(旧実業団リーグ)のチーム数を確保のために、地域リーグにしわ寄せが及び、チーム数を確保することが困難となった。これは地域リーグレベルでも企業チームが休廃部により減少したこと、あるいは地域リーグに参戦する予算確保が困難と判断してリーグから撤退する企業

リングスに、ユニチカフェニックスは東レへ、イトーヨーカドーは武富士へと変わった。しかし長引く経済不況の影響で2009年に武富士もまた廃部となった。日本一2回の元イトーヨーカドーチームは時代に翻弄され、二度の休廃部という厳しい現実を経て31年の歴史を完全に閉じたのである。

## 6. 変わりゆくリーグ

表5-1および表5-2は、男女のV・プレミアリーグ(旧日本リーグ)、V1チャレンジ・チャレンジリーグ(旧実業団リーグ)および地域リーグの2000年、2010年の参加チームである。

休廃部による企業チーム数減少によって、ルリーグの様相が大きく様変わりした。

1970年代から1990年代初めのバレーボール最盛期という時代、日本リーグでは男子の新日鉄、サントリー、松下電器、富士フィルム、JT、女子のユニチカ、日立、日本電気、東洋紡など伝統ある強豪チームが親会社の強力な支援のもと、企業のプライドをかけ強化を図っていた。そこに割って入ろうとする他チームとの激しい競い合いにより日本リーグ、実業団リーグ2リーグの牙城は極めて強固であった。男子の象印、日新製鋼、女子の小田急など創部当初から日本リーグ昇格を命題に十二分な強化策を講じ成功させたチームは別として、地域リーグからの昇格は至難の業であった。

これはそれぞれの企業チーム間における強化に対する資金

年度	Vリーグ	V1チャレンジリーグ	地域リーグ	
			東部リーグ	西部リーグ
2000	サントリー	豊田合成	NTT神奈川	松下電工
	東レ	NTT東日本	富士通	きんでん
	JT	東京ガス	東京トヨペット	大同特殊鋼
	NEC	TOYO TIRE	東京三菱銀行	豊田工機
	堺プレイザーズ	警視庁	新日鉄君津	東洋アルミ
	松下電器	NTT西日本		NTT 関西
	旭化成	松下電工		
	富士フィルム	NTT神奈川		
	日立国分			
	NTT西日本			
	プレミアリーグ	チャレンジリーグ	地域リーグ	
			東部リーグ	西部リーグ
2010	堺プレイザーズ	ジェイテクト	三菱東京UFJ銀行	クボタ
	サントリー	富士通	富士通グループ長野	OSU-Leones
	東レ	つくばユナイテッド	新日鉄君津	東洋アルミ
	パナソニック	東京ヴェルディ	トヨタ車体	パナソニック電工
	JT	大同特殊鋼	東京海上日動	NBKドリーマーズ
	豊田合成	警視庁	アイシン精機	Team みやざき
	FC東京	阪神デルフィーノ		大阪ガス
	大分三好	近畿クラブスフィーダ		
		きんでん		
		トヨタ自動車		

表5-1. 2000・2010年度 男子  
プレミアリーグ・チャレンジリーグ・地域リーグの所属チーム（成績順）

が多くなったこと、また1企業から複数チームの参加していたのが、統廃合で1チームに整理されたことの影響などが考えられる。

かつて地域リーグ参加は、夏に行われる全日本実業団選手権大会のベスト16進出が条件とされていた。参加したくともベスト16に進めなければその資格がなかった。ところが1999年度から、東西両地域リーグで男女とも8チーム制を維持できなくなると、実業団選手権ベスト16進出という参加条件はなくなり、むしろ実業団選手権の出場全チームに対して地域リーグ参加への勧誘が行われていたという。それでもチーム数確保が難しい状況は続き、東西地域でチーム数が違ったり、奇数チームとなったり、ついには女子は2002年度より全国1リーグとなった。そして企業チーム対抗という形式を見直し、2006年度からクラブチーム参加に門戸を開くことになった。それまで企業チームが強化策、クラブチームは普及策の一環と考え明確な区別がなされていたが、企業チーム激減の流れの中で、クラブチームにも参加機会を広げることとなった。

地域リーグ変遷について、実業団バレーボール連盟HPに次のように掲載されている。

る。

「地域リーグ」30年の歴史に幕～新「地域リーグ」へ

昭和56年1月に「実業団選抜男女リーグ」として始まった「地域リーグ」も、大阪府堺市の新日鉄堺体育館において、平成22年3月13・14日の2日間に亘って行われた第30回プレーオフ大会をもって、30年の歴史に幕を閉じた。

顧みると「地域リーグ」は、実業団リーグ（V1リーグ→V・チャレンジリーグ）、日本リーグ（Vリーグ→V・プレミアリーグ）への登竜門として開催され、男子は第3回大会から第18回大会まで東西各8チームで、女子が第17回大会まで東西各8チームの選抜出場を得て熱戦が展開された。

そして東部・西部の各リーグで勝ち抜いたチームがプレーオフに出場。ここで優勝したチームは実業団リーグに自動昇格。準優勝チームは実業団リーグ下位チームにリーグ入りを賭けて挑戦した。男子では、象印マホービン、

年度	Vリーグ	VI チャレンジリーグ	地域リーグ	
			東部リーグ	西部リーグ
2000	NEC	日立佐和	ソニー大崎	大野石油広島
	東洋紡	茂原アルカス	栗山製菓	三洋電機大阪
	久光製薬OS	NTT西日本	PFU	JAぎふ
	東レ	久光製薬スプリングス	エンジェル・クロス	トヨタ自動車
	イトヨーカドー	武田薬品	東京三菱銀行	
	日立	トヨタ車体		
	パイオニア	石川島播磨呉		
	JT	KUROBE		
	デンソー			
	シーガルズ			
	プレミアリーグ	チャレンジリーグ	地域リーグ	
			東部リーグ	西部リーグ
2010	JT	上尾	JAぎふ	
	東レ	日立	三菱東京UFJ銀行	
	久光製薬	PFU	京都雅	
	NEC	三洋電機	残波 WINGS	
	トヨタ車体	KUROBE	ベスピアス長岡	
	デンソー	健祥会	トヨタ自動車	
	パイオニア	四国 Eighty8		
	岡山シーガルズ	柏エンジェル		
		大野石油広島		
		熊本		
	Befco			
	GSS			

表5-2. 2000・2010年度 女子  
プレミアリーグ・チャレンジリーグ・地域リーグの所属チーム（成績順）

日新製鋼、豊田合成などが、また女子ではダイエー、小田急、JT、東北パイオニアなどが最終日本リーグへと昇格しており、このリーグの所期の目標は十分に果たしてきたといえる。その後、社会経済情勢の変化に伴って、バレーボール部を休・廃部する企業が続出したことなどもあり、第19回大会以降参加チーム数が漸減し、第22回大会からは女子は東・西での開催が困難となった。このため全国一次リーグとして開催し、その上位4チームによりプレーオフを戦うという方式となった。また、男子は東・西でリーグを開催しているものの両リーグの構成参加チーム数は減少してきた。このような状況の中、第26回大会からは財団法人日本バレーボール協会、日本実業団バレーボール連盟による主催に、日本クラブバレーボール連盟を加えて、クラブチームにも参加資格を拡げて開催してきた。第30回という記念すべき大会も、男子は「富士通グループ長野」チーム、女子は「JAぎふ」チームが優勝して幕を閉じた。平成22年度からは新たな大会である「全国6人制バレーボールリーグ総合男女優勝大会」＜全国各ブロックの「地域リーグ」⇒「東西決勝リーグ」⇒「グランドチャンピオンマッチ」＞がスタートし、これまでの地域リーグの精神はこの大会へと引き継がれることとなっている。

多数のチームの積極的な参加と熱戦の展開が大きく期待される。――

日本実業団バレーボール連盟 HP (<http://www.j-sva.com>) トピックスより

2010年のプレミアリーグ、チャレンジリーグをみると、男子18チームのうち日本リーグ時代から続く名門強豪チームが5チーム（堺ブレイザーズ、サントリー、東レ、パナソニック、JT）、1990年当時地域リーグに所属していたチームが8チーム、2000年以降に設立されたNPO法人を母体とするクラブ型チームが3チーム（つくばユニテッド、阪神デルフィーノ、近畿クラブスフィーダ）、クラブチーム（東京ヴェルディ）、企業チーム（大分三好）である。かつては規則上も企業チームしか参戦できなかったが、企業スポーツ撤退の厳しい時流の中、クラブチー



ムの参戦も得てリーグの形態を維持している。

同様に女子20チームをみれば、日本リーグ時代から継続しているのはNECただ1チームである。前チームの

日本鋼管	→	NKK		
松下電器	→	パナソニック		
八幡製鉄	→	新日鉄	→	堺プレイヤーズ
専売広島	→	JT		
東レ九鱗会	→	東レ		
電電東海	→	NTT東海	→	NTT西日本
日本電気	→	NEC		
旭化成旭陽会	→	旭化成		
大協石油	→	コスモ石油		
東京ガス	→	FC東京		
豊田工機	→	ジェイテクト		
新日本電気	→	日本電気HE		

表6-1. 男子チーム名称の変更

ユニチカ貝塚	→	ユニチカ		
東洋紡守口	→	東洋紡		
日立武蔵	→	日立		
全鐘紡	→	カネボウ		
倉坊倉敷	→	クラブウ		
日本電気	→	NEC		
東芝	→	シーガルズ	→	岡山シーガルズ
日本電装	→	デンソー		
日立茂原	→	茂原アルカス		
電電神戸	→	NTT西日本		
専売大阪	→	JT		
日立佐和	→	日立リヴァーレ		
東北パイオニア	→	パイオニア		
新日本電気	→	関西日本電気	→	NEC関西

表6-2. 女子チーム名称の変更

休廃部によりチームごと移籍したのが、東レ、久光製薬、岡山シーガルズ、1990年当時に地域もしくは実業団リーグに所属していたのは6チーム（JT、トヨタ車体、デンソー、パイオニア、日立リヴァーレ、PFU）、そして2000年前後に創部された新興の企業チーム（上尾、健祥会、柏エンジェル、大野石油広島、熊本、GSS）、さらに2つの企業チーム（三洋電機、Befco）、クラブチーム（KUROBE）NPO法人母体のチーム（四国Eighty8）となっている。

かつての紡績、繊維、家電メーカーなど大手企業が競ってチームを強化していた時代に比べると、大きくはない企業のチームがリーグの半数を支えている。

## 7. 頓挫したプロ化

バブル経済が崩壊し日本経済に不況の影が色濃くなった1994年6月に、日本バレーボール協会は「21世紀に向けたバレー改革案」と銘打ったプロ化構想を発表した。同年12月開幕の日本リーグを「Vリーグ」と改称し、「プロ契約選手の承認」「外国人選手の復活」「プロチーム（株式会社化）参加の承認」などを盛り込み、4年後1998年には完全プロ化との構想だった。当時は国際大会で男女とも成績不振に陥り、バレーボール人気も低下し始めた頃である。前年の1993年にJリーグが発足、日本国内に一大サッカーブームが湧き起ったことを受け、バレーボールもまたプロ化を目論み、新リーグ構想を検討した。いわば「二匹目のどじょう」を狙ったわけだが、協会自体のビジョンもJリーグのように明確ではなく、プロ化に必要な資金や条件整備などをすべて企業に丸投げするかのような、大雑把な「プロ化」構想では、リーグに参加している企業の賛同と協力を得られるはずもない。また選手たちも、社員として給与が保障され、保険や福利厚生、年金等の面で企業の傘下で庇護される生活から、個人事業主であるプロ選手として、企業から一切のサポートが無くなるリスクを考えれば、容易にプロ選手宣言はできないで

あろう。例えばプロ野球に比べて全体の試合数や1試合の観客動員も少なく、どの程度の収益があるかなど不安要素が多く、プロスポーツとして成立するかどうかかわからない状況であった。

日本のバレーボール強化は、世界一の実績や国民的人気を受けて、全面的に企業に依存する形だった。日本バレーボール協会はプロ化に関してもアイデアさえ出せば、あとは企業が実現してくれるとの甘い考えであったのではないか。経済不況により業績不振が始まった企業にとって、採算のとれない計画に協力するはずもなく、ほとんど進展のないまま1996年9月プロ化凍結を決定、事実上の断念をした。

## 8. まとめ

いったんプロ化を凍結した日本バレーボール協会は、将来のプロ化を前提としたVリーグの法人化を図る。まず2003年に協会内部組織としてVリーグ機構を立ち上げ、2005年に有限責任中間法人日本バレーボールリーグ機構として独立させた。2006年にはVリーグ下部組織のV1リーグ所属チームをVリーグ機構に加入させ、リーグ名を「プレミアリーグ」「チャレンジリーグ」に変更した。

日本バレーボール協会が唱えた安易なプロ化計画は頓挫したが、長引く不況の影響による企業スポーツ撤退の中、存亡の危機を迎えたチームでは企業頼みでない新たな運営の形が模索されている。

1998年4月、廃部が決まっていた女子チームのダイエーオレンジアタッカーズが複数のダイエー関連会社からの支援を受け、選手全員がプロ契約を結んでVリーグに残留した。しかし2年間で運営を断念、最終的には久光製薬へ事業譲渡（現・久光製薬スプリングス）された。

1999年6月、廃部になった女子の東芝シーガルズに関西、北陸の十六社が共同出資してチーム運営のための株式会社ワークを設立、トップレベルリーグ初のクラブチーム「シーガルズ」が誕生した。その後2001年10月に国体強化チームとして岡山に移転、2006年4月から「岡山シーガルズ」となり、県や市などの行政、地元企業の支援を受けながら、バレーボール教室開催や地域イベント参加、など、地域に密着した積極的活動を図っている。

男子では2000年12月に新日鉄ブレイザーズが法人化し、株式会社ブレイザーズスポーツクラブを設立、男子初のプロチーム「堺ブレイザーズ」が誕生した。バレーボールをメインとして地域に寄与貢献する活動を積極的に行いながら運営を図っている。

チャレンジリーグにおいても、2001年1月に東京教員クラブが東京ヴェルディバレーボールチームとして、2003年4月には東京ガスバレー部がFC東京バレーボールチームとして名乗りをあげた。

およそ30年間、日本のバレーボールは大企業の全面的支援を受ける形で、企業チームによる強化に頼り発展を遂げてきた。企業としては強豪バレーボールチームをもつことで、マスメディアへの露出による絶大な宣伝効果、強いチームや勝利というイメージによる世間の好感度アップそして社員意識の高揚などが期待できると考え、年間数億円というチーム運営コストの費用対効果が十分あると考えてきた。

しかし、経済状況の悪化による業績不振、経営合理化のための経費節減など企業側の事情と、人気低下によるマスメディア露出度減少といったバレーボールを取り巻く状況の変化によって、企業チームの撤退が相次ぐ事態となった。女子では日本リーグ創設当時の名門チームがすべて姿を消してしまっている。ここに大企業だけに頼る強化と発展の時代は終焉を迎えたのである。日本バレーボール界は、次の10年、20年後を見据えて新たなスタイルによる強化と発展を図る必要がある。

株式会社化やNPO法人が母体、複数の企業体の協力支援など、大手企業単独の形だけでない新たな運営方法がさまざま模索されている。そしていずれも地域に密着した活動が重要と考えている。

かつて中学校や高等学校にはほぼバレーボール部が存在したが、今では部活動としてのバレーボールがない学校が少なくない。また少子化によって学校単位ばかりでない競技環境の整備も必要と考えられている。いずれにしてもバレーボールが盛んだった時代は、生徒、学生、社会人から大人まで、身近にバレーボールを楽しめる環境があった。トップレベルのチームが地域密着の活動を積極的に行うことで、再び身近にバレーボールを楽しめる環境を再構築していかねばならない。

そして日本バレーボール協会は、Vリーグ機構傘下の「プレミアリーグ」「チャレンジリーグ」ばかり重視するのでなく、その下部にあたる地域リーグにも注視すべきである。Vリーグ機構でプレーする選手はごく一部のスーパーエリートで、参加するにも経費や条件整備などクリアすべきハードルは高い。もちろん世界をめざした強化という観点からそこをフォーカスするのは必然であるが、スーパーエリート以外で長くバレーボールの競技生活を続けたい選手の受け皿として、地域リーグの存在意義は大きい。5年前からクラブチームにも門戸を開き、西部リーグには「NBK dreamers」「OSU-Leones」といった大学生を加えたチームの活躍も見受けられる。昨年度より新たなスタイルで再スタートした地域リーグは、強化と普及の両面で幅広い選手が競技活動できる環境として重要と考える。

最後に、世界における日本バレーボールの展望であるが、バレーボールはネットという高さを介してボールの攻防を行う競技であり、原則的には高い位置に手が届く長身選手が有利という競技特性がある。世界レベルで体格（身長）の劣る日本は、特異な技術、戦術的優位性によって体格のハンディをカバーし、世界トップの地位を勝ち取った。しかし世界がその戦術に追いつき、技術を凌駕するほどの高さを備えられることで、日本の優位性は失われた。時代の移り変わりとともにバレーボールの戦術は、高さを活かした著しい進歩をみせ、バックアタックでの速攻など、日本人選手では容易に取り入れられないような戦術も編み出されている。今後日本バレーボール復権のためには、よほど斬新な技術や戦法を開発するか、あるいは日本人離れした体格、運動能力を持った選手が同世代で何人も現れない限り難しいのではないかと思われる。

## 参考文献

- |          |                               |      |
|----------|-------------------------------|------|
| 澤野雅彦     | 2005 「企業スポーツの栄光と挫折」           | 青弓社  |
| 杉山 茂     | 2009 「企業スポーツの撤退と混迷する日本のスポーツ」  | 創文企画 |
| 玉木正之     | 1999 「スポーツとは何か」               | 講談社  |
| 毎日新聞運動部編 | 2110 「スポーツ ゼロ年代 - 激動の10年を追って」 | 創文企画 |